

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

宮 本 又 次

一、緒方洪庵の生いたち

大阪の洋学はまず天文学をもってはじまり、麻田剛立・間長涯・高橋東岡によって基礎をおかれたが、また蘭法医学は永富独嘯庵に始まり、小石元俊へ、それより齊藤方策と共に橋本宗吉につたわり、橋本をめぐって大矢尚斎・伏屋素狄・各務文献・中天游に及んだが、これにて一段落をつけて、更に中天游より、緒方洪庵へと連綿としてつづくことになる。なお中天游は海上^{うみかみ}随鷗からも影響をうけている。

洪庵は若いころを別とすると、天保9年の29才から文久2年の52才まで、約24年間大阪に住み、蘭学塾を開いて、しばしば病の床につきながら、教育者として、医学者として、国のため、道のため、そして人のために働いた。そして晩年1ヵ年足らずは江戸で公の生活に入り、文久3年6月10日にみまかった。

緒方洪庵は文化7年7月14日卯の上刻、備中足守町に生れた。岡山県吉備郡にこの町がある。木下氏の屋敷町である。

足守藩は二万五千石の小藩で、秀吉の北の政所の兄杉原孫兵衛にはじまり、のち木下姓を名乗った。姫路城で四万石をもっていたが、関ヶ原の役のと備中賀陽・上房二郡の中で二万五千石を領し、のち所領を没収され、次男の利房が大阪の役に東軍に味方したので、元和元年二万五千石を足守にて領するに至った。洪庵が生れたときの藩主は八代利彪。白樺の歌人となった木下利玄は木下家13代目である。

足守は宮路山が北に温雅な山容を示し、嵐山に擬せられている。東には竜王山が聳え、頂上に赤松が茂り、西と南は開けて足守川がこの間をゆるいカーブ

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

を描いて流れていた。山陽本線から吉備線にのりかえてゆく。古い家並、足守川をわたって、東側の小高い所に誕生記念碑がたって、岡山県の指定史跡になっている。ここは吉備津神社を中心とする吉備文化の中心で、もともと文化には疎遠ではなかった。吉備津神社の神官の藤井高雅は洪庵の甥だが、国学者藤井高尚の養孫となり、歌人でもあった。こんな静かな町で、勘定方というむしろ事務官僚の軽輩の武士の家に洪庵は生れた。こうした風土とのかかわり合い、出自の特性は洪庵の将来を方向づけたであろう。

13才のときコレラの流行があり、このときすでに洪庵は従来の医者^の無力さを見せつけられたのであった。この年の12月27日フランスでルイ・パスツールが生れている。

洪庵の家系は代々佐伯氏で、父は佐伯源兵衛義実、のち瀬左衛門惟因となる。洪庵は末子で、男の三番目である。洪庵は田上をなのり、のち17才で、大阪で医学を学んだとき、緒方姓となる。

しかし緒方も田上も佐伯も同一系統なのである。九州豊後に緒方三郎^{これよし}惟栄（惟義）という豪族がいて、この流れである。惟栄の数代あとの惟康は豊後大友氏に仕えて、佐伯荘にすみ、佐伯と称した。のち惟寛のとき備中足守にすみ、佐伯氏の祖となる。足守の初代惟寛の子の弘直は田上氏を称したが、一代でまた佐伯氏になった。洪庵はこの先祖の名の田上氏を名乗ったが、実は佐伯も田上も緒方も同じ家系である。

上述の如く洪庵は文化7年7月14日に生れた。父の惟因44才の時の子である。父は中小姓本格で、33俵4人扶持^{あきら}をもらっていた。洪庵は幼名章だが、16才で元服して田上^{たかみせい}駢之助^{これあき}惟彰^{これ}と名のつた。惟は緒方家の代々の通り名であった。その文政8年5月に大阪で足守藩蔵屋敷を買いとる交渉に出かける父について大阪に出る。交渉はまとまり、この年8月足守に帰る。この上阪は洪庵とのちに大阪を結びつける因縁になったと思われる。

二、大阪に出た洪庵

16才にして「天下の台所」「町人の社会」大阪をはじめてその目を見た洪庵のおどろきは大きく、永く印象づけられたものと思われる。

足守藩の蔵屋敷は延享頃大阪鈴木町にあり、天明期には土佐堀白子町、文化11年頃には中之島常安裏町にあった。いまの中之島六丁目で、阪大医学部の南側、旧理学部の西側で、阪大とはきわめて近いところになる。所が天保6年になると堂島四丁目になっている。恐らくこの堂島四丁目の蔵屋敷入手のために父の惟因は大阪に来たものだろう。これはいま堂島浜通二丁目になっているあたりで、いまはどこかはっきりとは判らない。いま高速道路になった所はもと堂島堀割であるが、これは明治13年に堀られたものだから、あの辺ではなかったかと推定される。大村蔵と久留米蔵にはさまった間であるから、大村蔵をもとの大阪商工会議所のあととすると、堀割＝高速道路になっているあたりではないだろうか。その道をへだてた東隣りで、その隣りが小田原蔵になっていた。

やがて足守藩蔵屋敷が出来、惟因は留守居役となり、文政8年10月5日再び父と共に大阪に出て、蔵屋敷に住む。この頃の足守藩の蔵屋敷は中之島の西端にあった。洪庵は大阪で、文武の道を学んだが、病気がちだったので、むしろ医学を志して、文政9年7月に中天游（環）の塾（思々齋塾）にはいった。中之島の西端の蔵屋敷から中の塾に通う。このとき緒方三平(さんぺい)と名前をかえる。中天游の評判がよかったからだという。文政11年父と大阪をたって1度足守に帰ったが、7月27日三平の中天游入門の許可を父が藩に願い出て、正式にゆるされ、三平1人で足守を出て中天游の思々齋塾で学ぶ。中天游から格別に可愛がられ、4年間で当時の訳書はほとんどよんでしまう。しかし天游はあまりオランダ語が読めなかったらしいので（そうでないという人もある）原典について直接学ぶことの必要をといて、文政13年4月1人で江戸に留学することをすすめる。洪庵21才のときである。

なお文政9年中天游につくとき、「不孝かつ不肖の子」とかいた書き手紙をのこしてきたことについていろいろの憶測がなされている。浦上五六氏はきわ

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

めてドラマチックに解しているが、緒方富雄氏は『緒方洪庵伝』でこのことについてはふれていない。

むしろこの漢文体の文章は少年洪庵の決意を示すものと解すべきで、武士の子供が、ちがった医の道に進むためにはとるべき手続があり、この手紙をもって、父は文政11年7月藩庁に届けいでたものかも知れない。

天保元年4月、21才で大阪をたって、いよいよ江戸に出るが、しばらく上総国木更津にとどまって、子女に理学などを教えている。

天保2年2月三平は江戸に出て、坪井信道の塾にいる。洪庵22才のときである。信道は当時37才、文政12年から江戸深川で開業して、蘭学塾をも開いていた。

三、江戸の蘭学と坪井信道と洪庵

南蛮人伝来の医術は鎖国後も南蛮流外科として残り、のち和蘭流の外科と称せられた。

八代将軍吉宗の洋書の解禁によって、神田に天文台が出来、長崎から西川如見父子を招いて天文暦学の法を開いたし、青木昆陽に蘭語を学習させた。田沼時代には取締がゆるみ、長崎出島に出入する大名や武士もあり、南蛮渡来の珍器もはいる、禁書もひそかに入手するものがあつた。

漢方医の内にも「親試実験」の考え方がひろまり、自分の眼で実験しようとするに至り、山脇東洋の観臓が宝暦4年になされる。その『臓志』は玄白にも強い影響を与えた。

こうした風潮の中で明和8年江戸千住小塚カ原で蘭書解剖図譜を引照しての腑分けが前野良沢、杉田玄白によってなされ、初めて実験医学の基礎がおかれる。ついで解剖図譜の翻訳がなされ、4年がかり、11回も稿を更えて、上木して『解体新書』がなる。大槻磐水玄沢が仙台から安永7年江戸に出て、杉田玄白の門に入り、玄白の遺志をついで『解体新書』を重訂増補した。玄沢はオランダ語の文法も究め、手引書『蘭学楷倂』の著述もして、蘭学復習に便ならし

め、多くのものが玄沢に従い学ぶようになる。そこで玄沢は江戸に芝蘭堂をたてた。

磐水玄沢の門人中、宇田川玄随槐園は津山藩の医であるが、「玄真内科撰要」18巻を著し、ここに洋方内科がおこり、次第に眼科、婦人科に及ぶ。

芝蘭堂では伊勢の人で、玄随の養子となった宇田川玄真(号榛齊)が特にあらわれ、鳥取の人で、のち京都に移住した『波留麻和解』の著者稲村三伯(のち海^{うみ}上^{がみ}随鷗)、大阪の橋本宗吉、地理学ですぐれた山村才助(号昌永)などが出て、蘭学は次第に普及した。

江戸に開塾した坪井信道は実に上述の宇田川玄真榛齊の直門であった。高野長英、伊東玄朴、足立長雋と共に坪井は江戸にて鳴っていた。

信道は寛政7年生れ、美環池田の人、名は道、誠軒と号した。幼くして父母を失い、兄浄界に養われ、儒学を修めたが、のち中津に赴き、医学を修業、その間『医範提綱』をよんで西洋医学を志し、文政3年に江戸に出て、宇田川榛齊(玄真)の門に入る。長州侯に聘せられて、その侍医となったが、のち深川冬木町にて開業、診療、かたわら蘭学の研究にはげみ、日習堂を開き、多くの門人を育成した。教えをうけるもの数百人、青木周弼、川本幸民、杉田成郷、黒川良安、広瀬元恭らがここで学んで、その俊足といわれていた。洪庵もまたその高弟の1人となった。信道は嘉永8年没。

信道は誠軒と号したが、その人格は「誠敬を主とす」といわれ、弟子を教えてうまず、病者を診るに貧富にかかわらず、懇篤をきわめ、大医の名があった。「近世名医伝」にはわが国蘭法医学の主流をつぐ学者であるとしている。洪庵は彼から大なる感化をうけており、後年洪庵が大阪にて一家をなしたとき、信道とも洪庵とも親交のあった在阪の儒者広瀬旭荘は洪庵を評して「その忠誠なること坪井誠軒の風がある」といっている。(「日間些事録」)

四、坪井塾における洪庵

坪井は苦学力行、ついに蘭医として大成した人物であったが、この塾に洪庵

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

は4カ年間もいた。矢張苦学の生活で、塾の玄関番をやりながら、義眼をつくったり、時には按摩にも出て、学資をかせいだ。

信道は洪庵を信愛し、その窮乏をあわれんで、衣服をぬいで与えるほどであった。信道は小がらだし、洪庵は大がらで膝が出るほど短い着物だったが、洪庵は平気で着て勉学につとめた。学力も大いにすすみ、塾頭にまでなる。その勉強の様子は東京にある洪庵の墓碑に詳しくかかっている。洪庵の『病学通論』の自序にもものべるところがある。「始覚得如面上脱一膜、而指爪達痒处矣」。すなわち原書数10巻を読んで、顔にかかった膜がとれて、かゆいところに爪がとどくような気がするといっているのであるから、学力進歩の程が察せられる。

またこの間多くの翻訳や編述をなした。

学力がすすむとともに内外の薬品のことを知りたく、信道のすすめで、宇田川榛齊にもつく。

宇田川榛齊は、字を玄真といい、もと安岡氏、伊勢の人。江戸に出て宇田川玄随（槐園）のすすめで大槻玄沢に蘭書を学び、稲村三伯をたすけて『波留麻和解』をなした。宇田川玄随の没後そのあとをつぎ、宇田川二世となる。『遠西医範』『医範提綱』を出したが、薬物の研究にもあたり『和蘭局方』を訳し、その方面の権威でもあった。一時杉田玄白の養子にもなったこともあり、玄白の『蘭学事始』にも出てくる人物。信道の恩師にあたる。

榛齊も洪庵の才を愛し、仕事をさせ、すでに64才で余命いくばくもない榛齊は死ぬまぎわに洪庵に病理学書の編述をたのむ。

高野長英の妻は信道の妻の妹だったから、義理の兄弟。日習堂にも姿を見せたから洪庵は接する機会をもった。

洪庵は信道、榛齊の大家の外、箕作阮甫にも認められる。阮甫は津山藩の出身、京都で医を学び、更に江戸に出て榛齊に洋学をうけ、外科・産科の著書ある外、天文方の訳員ともなり、幅の広い学者であった。箕作阮甫の養子となった箕作秋坪はのち適塾に入門しているから、阮甫も洪庵の学力をよく知っていたものだろう。

信道の塾に入って1年半あまりで、23才のとき『人身窮理学小解』を訳した。天保3年のことで、これは刊本にならなかったが、写本としてよく行なわれた。人体生理学書としてはよくまとまったもので、ドイツ人ローゼのかいたものである。

『医薬品術語集』は坪井塾にいて、4年目25才のとき、天保5年に作った。この術語集はケンゾウなるものがあらわしたらしいが、サンペイ（洪庵）が改訂増補し、アルファベット順にした。これもよく弘がった。

『遠西医方名物考凡例』は天保5年12月に没した榛齋の遺言で、その大著『遠西医方名物考』の「補遺」に度量衡の算定を加えることをたのまれ、凡例として出した。またこのときの副産物として『和蘭局方』を訳している。

また『視力乏弱病論』『医学入門物理約説』『視学升堂』『和蘭詞解略説』もこの時代の労作である。『和蘭詞解略説』はオランダ語の文法で語学書である。

五、長崎修業

天保6年2月坪井塾を辞して、洪庵は故里に帰ることになる。父の惟因は江戸詰になっていた。洪庵が江戸に出た翌年天保3年から大阪留守居役から江戸詰になっていたのだが、天保6年になって父とともに3月12日に足守に帰る。これより先、緒方三平を「^{さんぺい}刪平」とかえ、足守に帰るまえに「判平」になる。藩主子弟三之丞をはばかり「三」をかえたものだろう。

大阪における恩師中天游が天保6年3月24日、洪庵の足守帰郷後10日余で死去したので、4月2日大阪にいて、中家にかけて、天游の恩に報いるため嗣子耕介の後見人として大阪にのこることになり、旧師の塾で蘭学を教えた。

幸い天游の従弟伊三郎が、銅版製作の傍ら医業を行って、中家の世話をすることになったので、洪庵は耕介を伴って、念願の長崎へ旅立つことになる。天保7年2月10日のことで、このとき緒方判平を洪庵とあらためる。洪庵は27才であった。

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

長崎での洪庵の師はいまだ判明していないが、恐らくはオランダ商館長ニーマンでなかったかと想像される。この頃専門の医師は来ていなかったらしい。しかしニーマン(Johannes Edewin Niemann)は、和蘭商館長であったが、多少は医学を修めたこともあるというから、色々と語学的な勉強にはなったであろう。

長崎では青木周弼、伊東南洋と共に『袖珍内外方叢』という薬劑、処方の本を訳した。

長崎にいること2年、洪庵は天保9年1月8日長崎をたって、足守に帰り、更に3月大阪に出て、瓦町に塾を開き、医業をおこなうかたわら、蘭学を教えることになる。ただしこの瓦町の家のごとはどのあたりか判明しない。長崎における最後の仕上げを終って、蘭方医の洪庵は大阪にデビューする。

この前年天保8年は注意すべき年である。この2月19日天満与力大塩中斉が乱をおこし、大塩焼といわれるように大阪の北部をやきつくした。東天満の一角からあがった火の手は2日2晩にわたって燃えつづけ、船場の112ヵ町、家屋一万数千戸を灰にした。これは明治維新への前哨戦でもあった。すでに新しい時代のあけぼのがほのかに見えそめた。だがこの惨禍を蒙った大阪も不死鳥のように焼土の中からよみがえっていった。1年もたつと船場の家並はととのって来た。この焼土から立ちなおったばかりの大阪の町に洪庵は新しい学問の原点をすえつけたのである。なお天保8年には將軍家斉の退位と家慶への交替もあり、諸国には疫病が流行していた。物騒なときであった。

(主要参考文献)

緒方富雄『緒方洪庵伝』、藤野恒三郎『学悦の人』、緒方富雄『蘭学のころ』、有動研造「大阪の洋学と緒方洪庵の適塾」(『江戸時代と大阪』)、『東区史』第4巻文化篇、「適塾」(昭和35年7月9日より27日間にわたり毎日新聞連載)、浦上五六『適塾の人々』、浦上・杉宜聞「生誕150年を記念して緒方洪庵」(大阪手帖、棹尾号)、松尾耕三『近世名医伝』、大阪大学『緒方洪庵と適塾』、中野操「大阪の蘭学」(『大阪の学問と教育』所収)、藤野恒三郎『日本近代医学の歩み』、杉宜聞「緒方洪庵」(大阪手帖、第5巻11号)、中野操「坪井信造」(『日本史発掘』所収)、宮本又次「大阪における蘭学の発達と橋本宗吉」(『上方の研究』第4巻所収)

六、大阪における洪庵の活躍と業績

天保9年洪庵は大阪にて開業（4月の初めごろ）してまもなく、この年の7月25日摂津名塩の医者億川百記の女八重と結婚した。仲人は中耕介環（2代目）であった。中耕介は天游の実子だが、従弟伊三郎がつぎ、その長女テツの聲に中耕介がなっているから、三代目になるだろう。百記と洪庵とは年令のへだたりはあったが、共に中塾の同窓であり、生前中に億川にその下心があったらしい。それで死後ではあるが、中未亡人が恐らくは斡旋したものかも知れない。洪庵29才、八重は17才であった。八重は病気がちの洪庵をよく助けて、大成させる上に功があった。洪庵の塾は開業当初から「適々齊塾」といい、略して「適々塾」「適塾」といった。これは洪庵の号の一つである適々齊に由来し、「人の役を役とし、自分のところに適するところを適としてたのしむ」という意味である。すなわち「適々」は「莊子」の太宗師篇にある。「適人之適、而不自適其適者也」にいでるらしい。しかし一般に「自適」というとき、世事にかかわらず悠々自適、遁世的になることを考え易いが、洪庵のはこれではなく、洋学を学ぶ動機についてのべており、人のため世のために尽すことである。医学者として教育者としての自覚から、その責務を果たすところに自らの適とする所を適としたと考えるべきである。

福沢諭吉はのち詩で、適々は風流のためのみでなく、塵界にあることをいっているが、正に洪庵の目ざす所は塵界、庶民的社会、世俗界にあっての適々を念じていたのであった。瓦町の塾は家賃18両で小さいものだったらしい。門生が次第に多く集って来て、何分にも長屋、借家だったし、狭くもなったので、過書町に家をもとめ、天保14年12月15日に移って来た。現在は東区北浜3丁目30番地になっている所である。

これは天王寺屋五兵衛の分家忠兵衛の持家で、元来は商家であったものを、購入後、手を加えて何度も改造されたようである。

洪庵の大阪における活動は天保9年から文久2年までの24年間だが、この間蘭学者として訳述や著作に専念し、また医者として診療にあたり、教育者とし

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

では人材を育成した外、公衆衛生の仕事や予防医学、ことに種痘事業に力をつくした。すなわち嘉永2年から種痘事業をはじめ、「除痘館」を古手町（いまの道修町5丁目）に設け、のちこれを万延元年10月に尼崎町1丁目（今橋3丁目）に移している。

ここではまず洪庵のこの間における学問的業績から見ておこう。

大阪における洪庵の著作の主なものは『病学通論』『扶氏経験遺訓』『虎狼痢治準』の三編であろう。

洪庵の業績は基礎医学と臨床医学の両部門にわたり、このことから蘭方医学の完成者ともいわれている。『病学通論』と『扶氏経験遺訓』との両書の出版によって、病理と治療の両部門が完成されたわけで、これによって洪庵の地位は高いものになった。洪庵は『病学通論』の例言で、疾病そのものの根源をつきとめることによって療法も知りうるものと考ええる。恩師坪井信道は本書の序文をよせて、「西洋医学はまず人体の構造を明らかにし、生理病理がこれにつき、その後に薬剤治方がしたがう」、家屋にたとえると、身体の構造を明らかにするのが礎、生理病理は柱、薬剤治方は楼屋である。ところがわが国の西洋医学は、礎はおかれているが柱が立てられず、にわかに屋を架している。「本書の出版によって西洋医学が本末を兼ねて説き、大小俱に尽すものであることを知るであろう」とする。

本書の成稿は弘化元年で、大阪に開業して六年目である。出版は嘉永2年である。しかし早くより腹案はもっていた。かつて病学を重んじたのは宇田川榛齋で、かねて青木周弼、緒方洪庵に数種の蘭書を翻訳させて、それを折衷して一書をなそうと企てていたが、病のため完成を見ず、洪庵はその遺命によって、その草稿をもとにして推敲を重ねたらしい。この『病学通論』のもとの草稿『遠西医鑑病機編』（2巻）と、それを補正した『遠西原病約論』（4巻）があるが、その推敲のあとはいちじるしい。これについては畏友藤直幹氏の精密な考究があるから、ついて見られたい。

洪庵は現象の奥にある測り得ないものを認めはするが、この不可測のものを

可測なものに転じようとしている。洪庵は「生力」が動植二物の生活運営を主司する力であるとしながらも、やがては究識されるものと考えている。

『病学通論』は洪庵の本で、刊本となった最初の単行本である。現存の刊本は3巻で、それで一応まとまっているが、完結したものではない。

『扶氏経験遺訓』はベルリン大学教授扶歇蘭士フーフェランド(C. W. Hufeland) (1764-1836)の内科書 *Enchiridion Medicum* をオランダ人ハーマン(H. H. Hageman, jr.)がオランダ語に訳した本(1838年)の翻訳である。フーフェランドはドイツ内科学の第一級の大家で、系統だった教科書である。洪庵も入手してくりかえし読んだ。この本の附録2編はすでに杉田成郷が「濟生三方」「医戒」と題して訳して刊行していた(嘉永3年)。洪庵はそれよりも先に天保13年に治療編を訳していたが、刊行がおくれ、天保13年からかぞえて15年目の安政3年秋具体化し、『扶氏経験遺訓』と題して、安政4年の暮に最初の3巻と『薬方編』2巻が出来上った。安政5年から刊行された。全30巻、本編25巻、薬方編2巻、附録3巻、文久元年の初めに全巻の出版が完了した。天保13年ごろまでは洪庵の名になっているが、あとの分は緒方郁蔵が若干協力したらしい。これは大阪での蘭学者としての全期間を投入した、いわば労作であった。洪庵は扶氏の説は恭く病床での実験に出たものであると讃辞を呈している。この本の江戸での刊行については洪庵の門弟箕作秋坪が世話をした。

『虎狼痢治準』は安政5年8月の刊行で、この年の夏大阪にコレラが大流行し、医師がその処方に困っているのを見かねて、大急ぎで原書から訳出して自分の意見をつけ加えたものであった。

洪庵は初めに生理学書、ついで薬局方、処方書、それから病理学書、内科書という順序でやっており、とくに基礎医学に心をひそめたことは洪庵の特色であった。

当時オランダ語をよみうる人は少く、そのため実力ある人は翻訳して啓発することが使命になっていた。洪庵の訳書は広くよまれ、刊本でなくても写本として流布した。それだけに洪庵の名声は上った。

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

『病学通論』出版のとき、「論理精密を尽しているが、惜しいことに文章が鄙俗だ」といわれたが、洪庵は若い時から西洋の学問に志して忙しく、文を学ぶ余暇がなかったと知っているし、儒学に通ぜず、漢文を得意としなかった。17才のときいわゆる書置をおいて医業修業に出たと伝えるが、この文章も誤字が多かった。しかしこれがまた洪庵の特徴でもあって、漢学の教養がないため、これに拘束されず、素直に西洋学を受け入れる得があったし、修辞にとらわれないため、平明通俗的で普及性をもっていた。むしろ最新の学説を平易な言葉で説くことを心がけたわけで、このことは福沢諭吉にうけつがれている。

洪庵は諭吉に「ほんやくは原書の読めない人に原書のところを伝えるのが本旨だから、平易なことばを選んで、わかりやすい文章を用いなければならない」と説いた。諭吉はこの教えによって平易な言葉で文明開化をといたのであった。

洪庵は教育、研究、著述の外、診療にも熱心であり、毎日朝早くから診て、午後からは往診にまわり、病気のときには門下生を代診に出し、急病人のところへは駕でいっている。

そのため評判は上り、開業後2年の天保11年に幕内の前頭4枚目。弘化2年には36才で関脇、嘉永元年には39才で大関になっている。もちろんこうした「当世流行町諸医師名集大鑑」などという番付は、町の好事家が人のうわさをもとにして作ったもので、それだけで名医とはいえぬ。しかし前頭になったとき洪庵でさえも嬉しかったと見えて、国の老父に書付表を送っている。父は「誠に御手柄と存候」とよろこんでいる。このことは、やがて経済的な余裕も出来、貧乏な書生を支え得たであろう。

過書町の適塾は借金でかったものらしく、天王寺屋忠兵衛は洪庵の仕事に理解を示し、支払いも年賦にしてくれた。しかし医業の繁昌によって次第に返済してゆけた。また天保13年には葭島に「解剖社」をも作っている。

(主要参考文献)

藤野恒三郎『日本近代医学の歩み』、緒方富雄『蘭学のころ』、緒方富雄『緒方洪庵伝』、富士川游『日本医学史綱要』、中野操『大阪医学風土記』、藤直幹「緒方洪庵—その個性と時代」(『大阪大学文学部創立10周年記念論叢』)、大阪大学編『緒方洪庵と適塾』

七、過書町と適塾の周辺

適塾のあった過書町は内北浜にあるが、元来淀屋橋南詰附近は八軒家につづいて、30石船・過書船の発着地であった。その関係で過書船(京都伏見と往復する船)にちなんで、そこを過書町といい(会所町とも俗称する)、その西の町を梶木町と叫んだ。これも楫の木を売る所で、矢張舟運と関係をもっていたであろう。

そして難波橋は御公儀橋の1つ。その南詰の1つ東の筋のところに金相場会所(いまは証券取引所)があり、梅檀木橋筋(三休橋筋)はまだ間の筋の狭い路であった。その南詰に彦根藩と南部盛岡藩の蔵屋敷があり、井池筋の角に銅座があった。当時の大阪では銅吹業が盛んで、大阪屋、和泉屋(住友)などがいた。長崎での貿易決済に銅を重視していたから、幕府は元禄14年大阪の銅座をして諸国の銅を買集めて長崎に送らせ、元文3年銀座加役として銅座をおいた。この銅座は寛延3年に廃せられたが、明和3年にまた改めて銅座として開設された。諸国銅山から出る銅を大阪の銅座を通じて、ことごとく買上げさせ、銅吹屋仲間をして精煉させ、棹銅として長崎に廻送し、その残余を民間に払下げた。大阪の銅吹屋中にもっとも有力なものが住友家であった。市中の銅商はこの銅座に集まって銅の価格を定め、内外に時の相場を記した札を掲示した。いま愛珠幼稚園のある所にあり、長崎から役人が来たときはここで泊り、和蘭商館長が江戸に参府するとき大阪を通過する際にもここで泊った。シーボルトもここで泊って、東西町奉行所や住友の銅吹所をたずねている。その他の甲比丹もここにたまったので、オランダ宿とも称せられた。そこに為川五郎兵衛という町人がいて、これがオランダ宿になっていた。

この過書町の銅座は寛政4年5月の大火で類焼したので、一時常安裏町に仮会所を設けていたが、すぐ同年の11月に旧地に新築して、これに移っている。

この寛政4年5月16日の大火は大阪では妙智焼について大きかったらしい。これは夜子の下刻西横堀御堂筋裏手より出火、同17日夜亥の刻ごろに鎮火した(西の上刻ともいう)。

『米商旧記』(4)によると、火元は七郎右衛門町2丁目塩屋源兵衛(又塩

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

屋喜八共有)で、町数89丁、棟数2,110軒、竈数10,542軒、土蔵187カ所、土蔵、納屋、公儀橋(天神橋)町橋8カ所、社地3カ所をやいている。蔵屋敷は16ヶ所で、大体天満方面が多くやけているが、北組惣会所、銅座屋敷、長崎俵物会所をやいている。南は御堂筋、東は烏屋町筋、北は大川町迄をやいているから、のち適塾になるところも銅座に近く当然にやけたであろう。しかしまもなく銅座の町並は復旧したに相違あるまい。適塾になっている建物もおそらくはこの寛政4年5月の大火で焼け、その後たったものであろう。

また難波橋の南詰には俵物会所があり(いまの朝日ビール大阪店建物)、長崎貿易のための俵物(煎海鼠、乾鮑、鱻のひれ)や諸色を集めるところであって、これも長崎と関係が深い。ともかくこのあたりオランダとは因縁のある所といえる。銅座(愛珠幼稚園)の北向い側に天忠の家があったが、これは天王寺屋忠治郎だろう。しかし適塾は天王寺屋忠兵衛の家を入手したものだが、忠兵衛と忠治郎の関係はよくわからない。いまの今橋1丁目と八百屋町筋のあたりを十兵衛横町といい(集英小学校付近)ここに天王寺屋五兵衛の邸宅があったわけだから、この付近には天王寺屋の一統が多かったものだろう。この辺には巨商が店をならべていた。天王寺屋忠治郎は梶木町に属している。これに対し天王寺屋忠兵衛は過書町3丁目にあった(寛政11年「手形便覧」)。所が「浪花両替銭屋名所案内」(文化初年頃)には天王寺屋忠兵衛は上上人町になっている。また文化6年の「大阪両替手形便覧」によると忠兵衛は今橋1丁目となっている。所が文化11年版「大阪両替屋所付」には、過書町3丁目とある。しかし天王寺屋五兵衛の系図にはのっていないから、忠兵衛家は分家でなくて、別家であろう。天王寺屋五兵衛家は大眉氏であるが、天王寺屋忠兵衛家は辻といったらしい。

すなわち近江国滋賀郡堅田の産で、佐々木左衛門尉定綱の後胤である。本姓辻氏、もとは「津路」と記した。正徳、享保の頃に忠兵衛正治は大阪に出て、梶木町(東区北浜5丁目)に住し、代々天王寺屋忠兵衛と称し、両替屋を営んだという。天王寺屋五兵衛との関係はわからない。しかし天王寺屋五兵衛家の墓

は久本寺（谷町5丁目）に代々あり、辻忠兵衛家も久本寺にあるから、別家か何かの関係はあったろう。

4代目忠兵衛正常の実弟が忠右衛門(寅之助、正倫)、文化7年5月17日梶木町の前記の所で生れ、天保4年7月24才のとき分家して、本鞆町（伏見町1丁目）に移り、加賀屋弥三右衛門の株をゆずりうけて、長崎糸端物五軒問屋に加入し、郷里にちなんで滋賀屋と号した。（『東区史』第5巻764頁）

なお寛政10年の「手形便覧」によると、天王寺屋系は次の如くなっている。

天王寺屋五兵衛(今橋1丁目)、忠右衛門(過書町1丁目)、忠兵衛(過書町3丁目)、伊右衛門(梶木町淀屋橋)、弥七(西よこぼりすじかいばし北)、六左衛門(今橋せんだんの木)、長治郎(天満又次郎町)、利助(新町橋にし詰)、喜三郎(堂島そねざき橋)、喜兵衛(土佐ぼり1丁目)、喜兵衛(順慶町井戸の辻)、常二郎(田辺やばしかいやまち)、久左衛門町(今ばしさかいすじ)。

下って天保14年の「大阪両替手形便覧」によると天王寺屋五兵衛(今橋1丁目)、伊右衛門(梶木町)、弥七(七郎右衛門町1丁目)、利助(藤右衛門町)、儀助(梶木町)、忠次郎(過書町)があがっている。天保14年といえば洪庵がこの忠次郎の家を入手した年であるから、矢張当時の両替屋の店をかったものであることは明らかである。

寛政4年5月16日の大火で銅座が焼けたことは明白であるが、適塾のところが家屋敷はこのとき焼けてたてかわったものの如く、現在の修築調査で、土壌から焼災にあったことが明らかになっている。

洪庵は天保14年12月にこの家を購入して移ったのであるが、従って適塾が重要文化財として意義があるのは矢張天王寺屋という由緒ある両替屋の遺構としても重要であり、寛政期に出来た民家とすると大阪市内では最古のものといってよかろう。

過書町の水帳があるとよいのであるが、いまだ発見していない。関西大学にある由にも聞くが、探したがわからなかった。御教え願いたい。

なお高麗橋通りには両替屋が軒をならべ、越後屋(三井)、金銀御為替御用達

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

の三井店もあった。過書町の西梶木町淀屋橋筋角には千草屋宗十郎（千宗）の店もあり、その1つ南の通りの尼崎町1丁目には鴻檜（鴻池檜蔵）、鴻市（鴻池市兵衛）が相向いあい、そのずっと東の方今橋2丁目には鴻善、鴻庄（鴻池庄兵衛）が相對していて、まったく豪商、分限者のいる地帯であった。こうした重要な所によくも洪庵が家を手に入れたものと感心もするし、枢要の地に進出したその明敏さをもたえたい。

また懐徳堂は適塾の一つ南の通り尼崎町1丁目（今橋3丁目）に位置していたし、山片升屋平右衛門家も梶木町の内（内北浜）魚の棚の角にあり（住友信託ビル）、ここに山片蟠桃がいたわけだし、有名な国学者尾崎雅嘉^{まさよし}もこの梶木町に住んでいた。尼崎町2丁目（今橋5丁目、安宅産業）には有名な儒者篠崎小竹の梅花社があった。この小竹とも洪庵は親しく交っていた。

過書町の一部は明治になって、北浜2丁目の一部と合して、北浜3丁目となり、過書町の一部と梶木町の一部を併して、北浜4丁目にした。

いまの横堀1丁目、もとの七郎右衛門町には颯川徳助という長崎廻船の間屋があり、この颯川家は長崎唐通事の出身である。牛痘のかさぶたをもたらした長崎唐通事の颯川四郎左衛門との関係を知りたいものである。

寛政版の「摂津名所図絵」によると、伏見町一帯には唐小間物屋といって舶来の奇玩珍器を売る店が数軒のきをつらねていたとある。中でも正奎こと正田屋奎兵衛というのは「摂津名所図絵」にもその店頭風景が出ていて、店も大きかった。山片重芳の「買物控え」である「家蔵記」を見てもそのことがわかる。

伏見町はいまの伏見町3、4丁目のあたりで、梅檀木橋筋から心齊橋筋^{せんだん}にいたる間で、ここには唐物を扱う間屋が集っていた。そして西の部分、伏見町4丁目の一部と5丁目のあたりはもと呉服町といい、ここにも呉服屋や唐物屋が多く、のちには伏見町を通じて道具屋も多くなる。舶来物屋、唐小間物屋もあり、珍品をならべる店があり、適塾生はエキゾチックな空気にひたれたであろう。

嘉永5年以來の唐小間物屋の百足屋又右衛門家も伏見町4丁目に居住してい

たし、木村兼葭堂も寛政5年正月伊勢長島から帰阪して、伏見町（3、4丁目のあたり）に一時住し、文房具をひさいでいたと伝える。5軒問屋の1つで天王寺屋忠兵衛の分家の滋賀屋忠右衛門（辻忠）も本鞆町（伏見町1丁目）にいたから、こうした国際的な環境をかもしていた。

伏見町の1つ南が道修町だが、ここには長崎五軒問屋の随一加賀屋四郎兵衛家があり、堺商人のあとである小西一統がこのあたりに多かった。なんといっても道修町は唐薬の集散地であったから、漢薬や洋薬をうるのにも便宜があったろう。除痘館に援助した大和屋喜兵衛は道修町5丁目にいた唐物屋だから、適塾ともちかい。

塾生は和蘭書を筆写したが、和紙に「どうさ」して、鶯ペンで写したものだ。磨った墨汁をインクがわりにし、3寸ばかりに切った鳥の羽の軸を道修町の薬種屋でうっていたので、これを買って来て、ペンのように軸を削って使ったということである。ガペンであろう。

当時篠崎小竹の梅花社が尼ヶ崎1丁目（今橋5丁目）にあった外、広瀬旭荘の家塾は淡路町切町（淡路町4丁目）御堂筋西へ入るにあり、泊園書院も淡路町にあった。後藤松蔭は大儒篠崎小竹の女婿だが、江戸堀に住み、のち梶木町（北浜5丁目）にうつり、帷を下して諸生を教授していたが、これも過書町の隣の町内であった。萩原広道は転々居を変えたが、高麗橋1丁目（高麗橋1丁目）に居住していたこともあり、これも程遠からぬ所である。つまり洪庵は北船場の商業経済の中枢に居をしめつつも、その附近がまた文運盛んな所であったから、あとう限り当時の文化人と交遊し、その教養を豊かにしようとしていたことがわかる。町人学者との交際から洪庵の処世の態度や学風が生れたものと思われる。

（主要参考文献）

宮本又次『船場』、宮本又次「北浜界限由来記」（『大阪春秋第3号』）、宮本又次「銅座の変遷と住友家」（福山大学『経済学論集』第1巻1号）、宮本又次「天王寺屋五兵衛家とその系図」（『上方の研究』第3巻）

八、種痘と除痘館とその土地

洪庵の医者としての事業の中、種痘はもっとも異色のあるものである。

天然痘は当時の日本ではおそるべきものであった。ホウソウの起源はインドにあり、中国、朝鮮を経て日本に渡って来た。そして多くの子供の生命をうばい、生き残ってもアバタになった。蘭学以前の医者も対策を考え、人痘種療法を考えていたが、これは軽くかかるつもりが、本当にホウソウになって死ぬ人も出た。蘭医たちは原書で、ジェンナーが寛政10年（1798年）牛痘種痘法を発見したのを知っていた。それがやっと嘉永2年になって、オランダ医モーニッケ（O. G. J. Mohnike）によって伝えられた。これは鍋島侯や橋村宗建の注文によるものであった。

越前の松平春嶽の待医笠原良策はこの必要を知り、春嶽をうごかして、幕府の許可を得、長崎奉行の大屋遠江守に内命が下された。また笠原良策は恩師の京都の日野鼎哉にたのみ、鼎哉は長崎通事颯川四郎八（四郎左衛門）にたのんだ。モーニッケのところへ来た痘痂（かさぶた）は橋村宗建のところへ来、鍋島侯の手にはいり、成功した。この「たね」を颯川四郎左衛門は自分の孫2人にうえ、そのついた「かさぶた」8つぶを日野鼎哉のところへ送って来た。嘉永3年9月のことであった。越前にいる笠原良策（白翁）は京都へ来て「たね」をもらい、福井へもちかえるが、その途中洪庵はわけてもらう。殿様の御用のものだが「たね」をたやさぬため分けるという名儀だった。牛痘菌は「ワクチン」だが、当時は「ハクシ」と呼び、「白神」の字をあてていた。白翁は京都から種痘のよくついた子供をつれて大阪へゆき、洪庵らへの分苗の式を行った。

この前にあらかじめ洪庵は大和屋喜兵衛にたのんで、大和屋伝兵衛の名儀で、古手町（もとの又市町と四十軒町）に家をかり、種痘所にしておいた。古手町はいまの道修町5丁目の一部である渡辺筋と御堂筋の間である。この地面は表口12間半、裏行17間でかなり広い土地である。もとは道修町3丁目の大和屋伊兵衛の所有地、家守は伊丹屋清兵衛であった。天明4年3月伊兵衛が相果て、娘大和屋さいのものとなり、別家手代大和屋弥右衛門が代判となり、家守は伊丹

屋清兵衛、ついで代判は同家手代弥五郎にかわる。天明6年閏10月弥五郎死去のため、手代卯兵衛が代判となり、家守はそのまま伊丹屋清兵衛であった。ところが寛政4年2月には大和屋武助が代判となり、家守は矢張伊丹屋清兵衛のまま、寛政8年正月になると代判を大和屋武助とし、家守の方は大和屋茂兵衛（寛政9年11月）となった。それ以後は水帳を欠き、どうなったか判らぬが、恐らくは道修町3丁目の唐物屋大和屋喜兵衛が「さい」から相続したものと推定される。そして大和屋伝兵衛が借家人、家守となったものだろう。このとき日野葛民というシーボルト系の日野鼎哉の養子も協力した。そしてたちまちにして大阪を中心に30数ヶ所の分苗所が出来上る。よくまとまった組織で活動したからであろう。この3人は誓をたて「是唯仁術を旨とするのみ、世上のために新法を弘むる」としている。（「除痘館記録」）

漢方医の反対と民間の迷信、「牛になる」とのかけ口、それにタネを植える子供がないこともあった。洪庵は6日に1度この種痘所の除痘館に出席したが、ここは安政5年4月24日はじめて官許を得た。この古手町の1ヶ所で種痘をやるという組織は、よい「たね」を絶やさぬためにも必要であった。

こうして洪庵らの努力がむくわれ、安政5年に公許なって古手町の除痘館を万延元年10月には尼崎町1丁目（いまの今橋3丁目）に新しい除痘館をたててうつっている。

今度の土地は安土町1丁目銭屋忠兵衛借屋住居の銭屋武兵衛の持家、他町持だから、代判家守備後町3丁目永来屋^{タイ}檣兵衛借屋近江屋幸助であった。これは表口8間半、裏行20間であった。

万延元年になって高池屋清之助が銭屋武兵衛から買請けている。町内持掛屋敷とあるから、高池屋清之助はこの尼崎町1丁目の同一町内に住んでいたわけで、高池屋は両替屋であったと思われる。そして借屋家守としては高池屋の借屋人おそらくは店員である脇屋文助があがっている。のち慶応元年11月に高池屋清之助が死去し、同人倅高池屋平太郎のものに同2年4月かわっている。まだ13才の子供が相続したので、高池屋喜次郎が代判となる。借屋家守は前と同

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

様に脇屋文助である。

以上における万延元年における購入はまったく除痘館のためになしたもので、大和屋喜兵衛と高池清之助が尽力したに相違ない。

ついでその西隣の袴屋嘉助代判袴屋喜七の土地、表口4間半、裏行20間もまた手に入れた。これはずっとのちで、種痘所掛屋敷名代家守は助松屋虎助である。これは慶応になってからだと思われる。2軒分を使うことになる。当初は葛民と洪庵と喜兵衛の3人が誓をたててやったが、のち美拳を聞いて中耕介・山田金江・原佐一郎・村井俊蔵・内藤数馬・山本河内・各務相二・佐々木文中・緒方郁蔵が社中に加わり、また社中の困苦を憐んで大なる援助を与えた人に天満与力父子2人と尼崎町の住人平瀬市兵衛の母があった。平瀬はおそらく千草屋宗十郎両替屋の一統の1人であろうと想像される。

尼崎町1丁目に一地面を買い求め、本館をここにうつしたとき、高池清之介を名義人とし、同家の手代脇屋文介を家守にしたことはすでにのべたが、これはまったく町の仕来りによるものだろう。

大和屋喜兵衛は道修町5丁目住の唐物屋であった。嘉永4年3月の唐物仲間取締判形帳にその名前が出ている。(『芝蘭遺芳』)

高池屋も尼崎町には多かった名前で、尼崎町1丁目に高池屋八左衛門が寛政以来ずっと出ている。町年寄もしている。

土居通夫が宇和島藩を脱出して、幕末大阪に来たとき、一時手代奉公をした家に高池三郎兵衛なるものがあるが、これも両替屋、金貸しや貸家業をなしていた豪商である。ともかくこの界限には高池屋一統がかなりいたものと思われる。(『土居通夫伝』)

なお両替屋で過書町には高池屋松次郎もいた。(文化6年「大阪手形便覧」)また高池屋三郎兵衛は北浜2丁目にて、両替屋であった(「進上とし玉、大阪両替屋所付」文政10年正月)。高池清之助(介)もその一統であり、分別家の一つであったろう。両替屋をしていたように思われる。

なお洪庵は『除痘館記録』をかいて、その建物を除痘館といっている。しか

し慶応3年9月になって公館となり、高池屋平太郎代判喜次郎掛屋敷同人名前を退き、あとは種痘所名代家守助松屋虎助としている。水帳では「種痘所」、又は水帳地図では「種痘館」となり、「除痘館」となっていない。明治初年には西側、東側の2軒分を併せて1つに記載している。この公館が廃せられ、緒方四枝の個人名儀になるのは明治5年10月のことであった。

除痘館がやっと官許を得た安政5年6月ごろから長崎よりコレラが流行りはじめ、大阪にも侵入し、世人は「コロリ」といって、ただおそれるばかりであった。医者も手の下しようがなかった。長崎の伝習所にポンペ (Pompe van Meerdervoort) がいた。この人は安政4年10月から長崎で洋式の医学校をはじめていたが、ポンペの口授を弟子の松本良順が筆記して洪庵におくって来た。これに対し、洪庵は自分の手許にあったモスト・コンラッジ・カンスタットの3人の著書を参照し、そのコレラの項目を大いそぎで訳し、1冊の手引書とし、『虎狼痢治準』と題し、自らの経験も加えて治療法を示した。これに対し松本良順の抗議もあったらしいが、なにしろ急速に対策を考えたことは偉とするに足りよう。これは小さな本だが当時としては一つの指針であった。

九、洪庵と町人との交遊

洪庵は大阪船場の北浜の地に開塾したわけである。商業の中心地に居を占め、大和屋喜兵衛、高池屋清之助の援助をうけている外、千草屋宗十郎家の一族と思われる平瀬市兵衛の後援を得ている。その他洪庵は大阪の町人社会にとけこみ、庶民的な交遊、交際をなしていたことは注目すべきであろう。

洪庵は郷里足守藩の侍医となった外は敢て大名と特別の関係をもたず、町人社会のまっただなか、船場のドマンナカで暮し、温厚篤実な生活をおくりつつ、塾生の指導は緻密にして、放胆の学説をもってしたというのが、この学風は自由な町人社会の環境とは切りはなしては考えられないし、その日進進々主義もこのような場所においてこそはじめて可能であったろう。

国のため、道のため、人のためということの中には、国体を失わないことを

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

含み、これは諭吉の独立自尊につながる思想の原点でもあったろう。

洪庵においては「医は仁術」との信念が生活の全般をつらぬいており、これがまた学問へのひたむきの精進、最新知識の普及ともなったであろう。

これらはもとより洪庵自体の内的要件、その不屈の信念にいでようが、また大阪的町人的環境の外的条件が強くはたらいていたであろう。

除痘館設立にあたっては日野葛民、大和屋喜兵衛らと誓をたて、謝金をうることがあっても私せず、さらに仁術を行う資金とすることを第一の規定としていた。その後これに加わったものもみな身心を勞し、自費をなげだし、12ヵ年に及んだというが、これは洪庵の徳望にもよろうが、町人的結合の強さが支えたこともありうる。

洪庵は和歌をたしなみにしていたが、これも漢詩よりも彼にむいていたからであろう。洪庵の甥藤井高雅の仲介で、岡山藩士で大阪で国学を教えていた萩原広道について学び、多くの和歌をのこしている。

また篠崎小竹、後藤松蔭、広瀬旭莊ら一流の文化人とも交遊し、とくに旭莊と親交があり、お互に世話をしあっている。

このような大阪の町人、文人との交遊によって、他の地では見られぬ雰囲気から滋養分を摂取したに相違ない。

上述の如く洪庵は和歌をこのみ、多くの和歌をのこし、短冊も多数残っている。

萩原広道を師として添削してもらったりし、新古今風の和歌を自分でも一部まとめて歌集風にしている。それらは昭和31年4月緒方富雄氏の手で出版された。

それは「春の巻」「夏の巻」「恋の巻」の三部と「詠草」と題したものの一部であるが、詠草は洪庵自身で朱筆を加え、まとめておいたものである。あとの三部は短冊からまとめて佐々木信綱に整理してもらったものである。

萩原広道は備前岡山生れの藩士であったが、致仕して大阪に來り、萩原鹿造について、広道とあらためた。大国隆正にも学び、本居宜長に私淑していた。大

阪では各地に住したが、高麗橋1丁目に住み、源氏物語を講義していた。

洪庵が広道と相知ったのは、病のとき洪庵の甥で広道とも親しかった藤井高雅を介して診てもらった縁によると伝える。篠崎小竹、中玉樹と共に洪庵は春日寛平の家に会して、広道から「源氏物語」の講義を聴いた。この講義は「花の宴」までで、広道が中風症にかかり、とだえ、同時に稿もつづかず、14巻で上梓され、嘉永7年『源氏物語評釈』の著となった。これはいまでも源氏評釈中の権威書として認められている。久貝因幡守正典の斡旋で、佐々木春夫の助力をうけている。

藤井高雅は幕末の国学者として著名である。

藤井家は備中国吉備郡宮内の吉備津神社の社家頭である。高尚の実子高豊が早逝し、吉備津神社の社家堀家より光次郎を養孫とし、この光次郎がのち高雅となった。高雅の母は洪庵の姉キチで、つまり高雅は甥にあたる。洪庵はしばしばこの甥の高雅に和歌を送って見てもらっているし、文通も多い。

洪庵は大阪にては広道に教を乞うた外、大隈言道、佐久良東雄などと集って宴をはり、歌会をしたり、広道と共に嵐山に同道し、清遊をたのしんだこともあった。中島広足との交りも認められる。風流を解した一面もあったのである。

大隈言道は筑前福岡の人、名は言通、通称清助、別に葺堂と号した。香川景樹の流れを汲んで、和学及び和歌をよくした。のち大阪に寓居し、教授もした。晩年に郷里に帰り没す。野村望東尼はその門下であった。洪庵が親交をもったのは、その大阪時代であった。

洪庵は「章」をかき、ときにかたわらに「アキラ」とルビをつけているが、平仮名で「あきら」と書いたものもあり、稀には「花蔭」と号したものもある。

歌会を自宅で開いたり、除痘館で催したりもし、高雅が備中宮内で「中山尚齒会」を開いていたのをまねて、自ら大阪で「尚齒会」を先達して開いてもいるが、尚齒会12人は僧侶、神官が多く、座摩神社の渡辺資政などもいるが、堂島の米仲買として知られた室谷賀親もいた。室谷家は寛永元年から大阪に來り、堂島にあり、播磨屋仁兵衛と称した。8代目を賀正といい、学者文人として知

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

られ、その長子は賀弘、風流韻事を好み、鴻池翠屋とも交遊したが、その弟の賀親は梧桐園と号し、和学、本草学をおさめ、兄の賀弘をついで、室谷播磨屋仁兵衛10代目となる。明治大正期に室谷鉄腸氏が出たが、この人は郷土史に詳しく、珍本を保存されたので有名。「御触書の留并浜方記録」はとくに有名であったが、本庄博士の手によって刻書されている。（『近世社会経済叢書』第2巻）

大阪の豪商として著聞していた播磨屋とも洪庵は和歌を通じて交わりを結んでいたわけで、この点も注目すべきであろう。

（主要参考文献）

浦上五六「適塾おぼえ書」大阪手帖第5巻2・7・8号、『東区史』第5巻人物篇、緒方富雄『緒方洪庵伝』、緒方富雄『蘭学のころ』、石田誠太郎『大阪人物誌』正統、宮本又次『郷土史にかがやく人々』(1)(2)。

十、教育者としての洪庵と江戸出府

以上緒方洪庵の生いたちより、大阪での開塾の事情を中心にしてのべ、町人社会と適塾とのかかわりに中心をおいてのべて来た。洪庵の学風、業績その他のべるべきことは多い。その塾生、門下の人々についてかいてもいろいろある。しかしそれらは別の機会にゆずる。ここでは結論的に洪庵の教育と江戸出府の事情をのみ略述しておく。

洪庵のもとに入門した塾生は入門帳によると洪庵大阪在住の24年間に633人にのぼった。また入門帳に記されていないものをふくめると前後3,000人におよんだといわれる。

出身別に見ても、青森県をのぞく全国の各地域からもれなく集っている。

適塾での教育は、学級を設けて組織だった蘭学教育をした点で注目されている。塾は塾頭がこれを統率し、以下、全くの実力主義でクラス分けをしていた。この実力主義は徹底しており、席次級順は入門の前後に関せず、年令の少長を問わず、ただ学力の優劣に応じるというもので、座わる場所も寝る場所もそれによっていた。洪庵はもともと医者であったから、適塾も医者の子弟が多かつ

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

たが、洋学を教える所が他になかったから、いきおい医学志望者だけでなく、自然科学、薬学、兵法に志す者、西洋事情を学ぶ人など多くの人材が集ってきたから、その学問も医学にとどまらず、蘭学の一般教育や物理学や化学など洋学一般の研究が行なわれていた。洪庵は徳川封建体制はもはや終りに近く、西洋学がこれからの日本にとってぜひ必要なことを知っていたから、あらゆる分野にあたって西洋の学問と知識を得ようとする若者たちに、貴賤上下の差別なく入門を許した。塾は洪庵宅の2階であったが、1人わずか畳1枚を自分たちの住居とする、数十人の若者が昼となく夜となく旺盛な知識欲と情熱にもえて、よく学びよく遊ぶという自由奔放な生活をおくっていた。これらの塾生の生活は当時の風習では奇行とされるようなことでも、科学や理屈に合わぬことなら大胆にうち破る気概を表わしていた。このような若者の中から、幕末、維新期の動乱に重要な役割を果たした人々が輩出した。大村益次郎、佐野常民、箕作秋坪、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎、福沢諭吉、花房義質らのことはよく知られている。橋本左内は福井の医者の子であったが、16才の時適塾に入門した。彼はたちまち塾内で頭角を現わした。後、黒船が浦賀にやって来た時、世界の大勢を学んでいた左内は、「開国」「攘夷」論議の渦中に飛びこむ。その主張は幕府の怒りにふれ、ついに安政の大獄に連座して、1859年、26才でその短い命をとじた。もう1人の塾生、大村益次郎の活躍は歴史上注目されている。大村益次郎は幼年より暴れん坊といわれていたが、適塾に入るとともに勇気と大胆さに加えて、兵学、築城、砲術の研究により知識を加えていった。もとより医学の術にもたけていて、解剖学にもすぐれていたといわれる。後、宇和島藩、長州藩より招かれ、軍事教育の専任者となった。益次郎は長州藩において兵制改革を行ない、洋式兵制を採用し、最新式銃を購入するなど、長州藩の軍備をかためた。1868年薩摩藩と連合した長州藩は益次郎の編成した洋式軍隊で、幕府を打倒し、伏見、鳥羽の戦い、上野彰義隊との戦いに大きな効果をあげた。

福沢諭吉の業績については今や何も語る必要はないほどである。

諭吉の活躍は適塾生の中でも、もっとも後世に大きな影響を残すものであっ

緒方洪庵と適塾と大阪の町人社会

た。慶応義塾の創始者であり、海外事情を初めて広く紹介した人であり、「自由民権」を説き、独立自尊を唱えた人であった。その思想は今もなお新しい。近代デモクラシーの精神はおそらく青年期の数年を現実的、合理的なしかも自主的な大阪の町で過ごし、適塾に学んだことにより培かれたものであろう。諭吉の自伝『福翁自伝』には適塾時代での楽しく、かつ勉学に励んだ青春時代の思い出と緒方洪庵の人格、学問が尊敬をもって語られている。

洪庵夫妻はこれらの秀才を育てるに当って、塾の直接の運営を塾生の中から選んだ塾頭に任せるといった方法をとった。しかし寛容で、誠実で、人間味あふれた思想につらぬかれた洪庵の人格は塾生に大きな影響を与えた。適塾は単に洋学を学ぶ場所でなく、若者の人間形成の場であった。

文久2年（1862年）50才を越えた洪庵の名声はもはや大阪の一町医者のものでなかった。この年、將軍家は洪庵の評判を聞いて、侍医として招くことを決定した。洪庵は大阪の町と適塾に限りない愛着を感じていたから、大阪の町を離れ、江戸におもむくことを心よしとしなかった。しかし再三の招請でもあり、遂に断わり切れず、江戸に移ることになった。江戸での洪庵の職務は將軍家奥医者と西洋医学所頭取としての任務であった。西洋医学所での教育はやはり適塾方式の教育で、この名声を聞いて集まる者が多かった。この医学校は幕府崩壊後も明治政府直轄の医学校となり、のち東京大学医学部にまで発展した。しかしわずか江戸在住10ヵ月で、この1代の偉人は病弱と過労のため世を去った。しかし偉大な蘭学者、医学者、教育者精神は死んではいなかった。洪庵の意図は明治の建設期にはなばなく開花する。適塾から発展した大阪大学に、適塾一福沢諭吉から慶応大学に、西洋医学所から発展した東京大学に。